

令和2年度 小平市立小平第十三小学校 学校評価報告書

学校教育目標 生きて働く知識技能の習得と未知の状況でも対応できる思考力・判断力・表現力の育成、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養を目指し、次のとおり教育目標を設定する。
 ◎ 自ら考え行動する子ども(重点目標) ・ 仲良く助け合う子ども ・ 明るく元気な子ども

目指す学校像(ビジョン)
 【目指す学校像】 ○人権感覚をもち、一人一人の子どもを大切にできる学校 ○児童・生徒が主体的に考え、活動できる生き生きとした学校
 【目指す児童像】 ○自ら考え、積極的に行動する子 ○明るく健康で、人間性豊かな子
 【目指す教師像】 ○常に学び合い、よりよい授業を目指す教師 ○居心地のよい学級・学校づくりに取り組む教師 ○地域連携に励む教師

前年度までの学校経営上の成果と課題
 ○教職員一丸となって「健全育成」と「児童理解」に熱心に取り組んできたことにより、児童にとって居心地のよい学級・学校を実現できたことが成果である。
 ○基礎的・基本的な学力の定着及び知識や技能を活用し、工夫して課題解決を行う学力の育成を更にすすめることが課題である。

	具体的方策	第1回評価		課題と対策	第2回評価		学校関係者評価	課題と次年度以降の対策
		努力目標	成果目標		努力目標	成果目標		
学力の向上	①ホワイトボードの活用 ②授業アンケートの実施 ③「はい、立つ、です」の徹底 ④英語科授業の充実と小・中連携 ⑤ICT教育機器の拡充と活用 ⑥学習支援ボランティアの配置と個別指導 ⑦東京ベーシック・ドリルの活用	2	3	ホワイトボードの活用や、「はい、立つ、です。」等の徹底は年間をとおして浸透してきた。 学習支援ボランティアの配置と個別指導は、感染症予防のため、外部ボランティアについては未実施。代わりに「補習教室」を少人数で実施して個別指導に努めた。 東京ベーシック・ドリルの診断シートを2年生以上で、年間2回実施した。算数の学力定着度を把握し授業改善に活用している。	3	3	「規律ある授業」の項目が89%で、昨年の85%を上回ったことは成果として捉えられる。逆に「考えや表現力」が85%となり、昨年の90%より若干数値が低下したことは残念である。今後の課題として改善の努力をしてほしい。	2年生以上で、東京ベーシック・ドリルの算数診断シートを活用して学力を把握した。学年によって定着状況にバラつきがあり定着率の低い学年には補充的指導を行う必要がある。 どの教員も毎日の家庭学習を設定し、学習内容の選定や実施状況の把握に努め、効果が表れている。一方、保護者の評価はより多くの肯定的な回答が得られるよう、今後は保護者や学校より等で家庭学習の行い方や読書の定着について啓発していく。
健全育成	①あいさつ運動の実施 ②いじめ防止校内委員会の充実 ③セーフティ教室の実施 ④生活の決まりの見直しと順守 ⑤交通安全教室の実施 ⑥特別支援学校との交流会 ⑦クラブ・委員会活動	3	3	「元気な」あいさつ運動は、コロナ禍の下で推進が難しい環境だったが、家庭の協力を得ながらあいさつの大切さを指導してきた。いじめ防止に関する授業やアンケート等を予定どおりを行っている。重大な事態に至る例は、発生していない。 特別支援学校との交流が実施できなかった。 コロナ禍により縮小傾向にあった委員会活動を、何かしたいと願う児童の思いから、図書委員会や音楽委員会によるTV集会や代表委員会による玉入れ大会など、新たな取組を行った。	3	4	「友達と仲良く過ごせている」の項目は94%(昨年95%)で肯定的な評価だったことがよかった。 「あいさつ」の肯定的評価は94%(昨年84.6%)で、「学校が楽しい」は90%(昨年87%)となり、昨年より評価する数値が伸びたことは成果である。	アンケートは年3回実施したが、年間を通じていじめの訴えが減少している。保護者からは高評価を得ているが、いじめ防止授業の工夫を更にすすめ、引き続き、全教職員で未然防止、早期発見・早期解決に努める。 「あいさつ」「学校は楽しい」とともに、昨年度より肯定的な回答が増したが、今後は、児童と児童、教師と児童とのよりよい関係を更に築くことができるよう努める。
特別支援教育	①教室前面の掲示物の配慮 ②特別支援教室の効果的運営 ③児童・生徒一人一人の正確な見取り ④特別支援巡回指導の活用 ⑤個別指導計画の作成と活用 ⑥特別支援教育校内委員会の充実 ⑦こげら支援シートの活用	3	3	全教室に大型タイマーを設置し、教室環境の整理に努めた。 特別支援教室の指導を効果的に進めるように、学級担任と巡回指導教員、心理士等との連携を図った。 個別指導計画の作成を、通級児童のみでなく支援の必要な児童の範囲を広げて作成した。 校内委員会は、こげら支援シートの活用や児童資料の充実を図った。	4	4	コロナ禍の中で保護者会などを十分に開催できなかったが、「保護者と話す機会」の項目で91%の保護者が肯定的な評価を行っていることは、学校としての努力が高い評価を得ることにつながったと言える。	特別な支援を要する児童の全体に対する割合は増加している傾向にある。一人一人の児童の特性に応じて、児童の教育的ニーズを把握し、生活や学習上の困難を改善又は克服するため適切な指導を行う必要がある。 また、今後は教員の特別支援教育についての理解を深めるとともに、指導スキルを向上させ、組織的な対応力を更に高めるようにする。
体力の向上	①感染症対策の理解と実践 ②なわとび技能の向上 ③マラソンの取組の強化 ④ラジオ体操の交流会 ⑤楽しみながら運動プログラムの実施 ⑥基本的な生活習慣の確立 ⑦年間体育の計画と実施	3	3	教職員が一体となって感染症の理解に努め、出来ること・考えられることについて、感染防止の取組を行った。 マラソン・縄跳び以外にも、学年別短距離チャレンジや学年別玉入れ、体力アップチャレンジなどの取組を、感染防止を図りながら実施した。 長期の臨時休業の影響もあり、再開後の生活習慣に心配な児童が多い傾向になった。	3	4	体力向上についての項目では、96%(昨年97%)の肯定的な評価だった。コロナ禍の中での学校の工夫が、保護者によく周知されていると言える。 生活習慣については、87%の家庭から学校の呼びかけに肯定的な協力をいただけたことがよかった。	昨年度行った体力向上旬間としての取組を、本年度は月間で行った。楽しみながら子どもたちが意欲的に取り組み成果を上げている。一方で、新型コロナウイルスの感染拡大防止の対策により、思うように運動する場面を広げることができなかった。 今後は、コロナ感染症の感染状況に鑑み、感染防止の対策をとりながら行うことができる取組を開発・実践していく必要がある。
ライフバランス	○年間で2回の勤務時間調査を実施し、教員からの聞き取りを行う。	3	3	9月・2月の自己申告面接時に教員から聞き取りを行い、業務の効率化による在校時間の短縮等、改善の手ごたえがあった。 勤務時間調査は、月ごとにタイムレコーダーのデータをチェックし、勤務時間終了後の在校時間が長い教員に対して業務を効率的に行う手だてについて確認した。	4	4	時数軽減を受けている教員を含め、全体として30%以上の時間短縮を行った。校務の要を担う教員ほど高評価を示した。全体の在校時間が減少したことは、取組の成果の表れと捉えられる。	新たな時数軽減モデル校としての取組やスクールサポートスタッフの導入は、ベテラン・中堅を中心に勤務時間の改善につながった。一方、若手教員は在校時間が長い傾向があるため、人材育成の要素の中に効率的に業務を行う改善を進める必要がある。 校務の精選と、組織の活性化を図り、働き方の改革とライフ・ワーク・バランスのとれた健康な教職員集団をめざす。